

東京における工場用汽罐とその製造業者：1889年「汽罐種類取調」を起点に / 今泉飛鳥 21巻2号、1-20(2017)

本稿の課題は、1889年に東京府が行った工場用汽罐に関する調査の結果の検討を通じて、明治前期の東京における機械普及の経路の実態を明らかにするとともに、その民間製造業者に迫ることである。

先行研究によって、日本の機械工業の発達は、軍工廠や大企業に限らず、しばしば地域的な需要に依拠する民間工場の活動に基づいていたことが明らかにされている。しかし資料の不足によって、個別の製品の製造と流通を把握することや、特に都市部における各製造業者の発達を跡付けることは困難である。この調査では東京の工場で用いられていた汽罐について名称、製造業者、能力、製造年月、使用年月、そして工場が設定した使用規則などの属性が書き上げられている。従って、この資料によりある程度量的な情報を得ることができる。

分析によって、多くの汽罐は導入から日が浅いことが明らかになる。これは、当該期における更新需要の活発さを意味するものであろう。また、外国製品と内国製品が市場を二分しており、前者は後者よりも大きく、古い傾向にあった。最も有力な国内製造業者は赤羽の官営工場（赤羽工作分局）であり、その製品は民間工場へ中古品として供給されていた。二大民間製造業者である福沢と原は、同業者の緊密なネットワークに支えられており、ともに船用汽罐の製造を起点としていた。政府部門は汽罐産業に対し、単に官営工場を運営するのみならず、民間業者が工場に援用するような船用汽罐の諸制度を整備することでも貢献していた。本稿は、船用汽罐の需要と官営工場の供給が、ネットワークや制度といった要素に支えられながら、東京における汽罐の普及の二つの原動力となったと結論づけている。